特103
141

佛教夢物語

一名光明和合菩薩記

272
763

始

特109
141

舌代

貧道は幼少の時に父を亡ひ母の手一つに養育され貧困の中に生長しましたので學文と言ふては寺子屋の教育も受た事もありません明け暮れ賤業に從ひ生活の道に奔走しまして慈母に孝養するの外餘念は更にありませんでしたが後又母を亡ひまして悲嘆のあまり兎角浮世が厭になりまして終に出家して佛門に入る事となりましたが別に學文を勵みて出世の僧となる望もなければ寺中に在りましても朝夕師匠の傍に奉仕して洒掃應對の事から薪水の勞を執りまして暇さゑあれば續經して亡き父母の冥福を祈るを唯一の樂として沙門の生活をしまする事が茲に三十年であります此の間に高僧や智職が當地方へ巡錫せられますと其後を慕ひまして說教や法話を聽聞する事が度々御坐いましたが何分寄る年波に記憶力が非常に減退しまして隨て聞けば隨て忘れると言ふ有樣で心にあるのは法席に列なて居る間のみで折角聽きまーた高論卓說も右より左へ扳け一度耳邊を通りました松風の昔の樣なもので少ーの痕跡をも留めませぬから我身にとりましては何の利益もありませぬ寧始めから聞かぬに如かずと人に言れても決して謗言とは謂はれませぬ處で近來大に感ずる處が御坐いま

2. 5.
内文

して今後は演說や說敎を聽く度に是を筆記して老後の樂にせんと思ひ立ちましたが例の無學文盲の身の悲さは筆の運や文の綴り方が思ふに委せませぬので其時其時の苦辛と言ふものは實に何とも御話になりませんです今春も或る學僧が我が住む積德會へ來られまして種々面白き演說や法話が御坐いまーたので是を書き記そうと思ひまして廻らぬ筆に苦ーで居りますと精神が非常に疲勞しまして終に睡眠を催し不知不識夢幻の境に入りましたが一向知らぬ土地でありますから先づ道を溪水の迢にとりまして石を飛だり朽木の橋を渡りたりして漸く一つの靈山の麓に着きましたが別に人影も見へませぬので彼處此處と逍遙して居りますと白髮の老人が薪を脊負て通るに逢ひましたから此處の地名を問ひますと是れは富貴山と言ふて往昔より諸佛集會の淨土なりと言ひ傳へたれども我は其地を踏し事なしと答ゑました貧道は之を聞きまして老人に厚く禮を述べ欣喜雀躍して荊棘の中を押分け絶壁を攀たり羊腸たる峻坂を登りたりして終に絶頂に達しました處が諸佛菩薩の集會し給ふ道場と言ふ樣な形跡は少ーも見へませんので茫然自失少時間佇立して其邊を見廻して居りますと遙か向の菩提樹下の石の上に二人の道釋仙人らーき者が對坐して居るのを見受ましたから近寄りて能く視ますると一人は僧形にして加意を手にして居ります又一人は優婆塞に似て白髮白髯の人でありまして何事か頻りに問答して居る樣子でありますから貧道は傍の木蔭に隱れて二人の談話に耳を傾けまして聽てみますると法躰の人は法樂比丘と云ひ優婆塞の如きは大道眞開と云ふ行者でありまして比丘は行者に道を敎へて法を說くので御坐います其の言ふ處は諸佛の神呪光明眞言の畧解を始め五戒八戒十戒十善戒十定の掟布施地獄の由來等凡そ佛法に關するものは細大漏さず說き去り說き來る其樣は往昔大賢釋迦如來の祇園精舍に說法し給ひしも實に此の通りであつたろうと思はず知らず拍手感歎致しました聲を聞て比丘は此方を顧て大喝一聲しました誰呵せられて貧道は非常に恐怖しまして流汗滿身を潤したと思ますと忽ち夢は覺めまして身は矢張積德會に在りて机に凭り午睡して居たのでありますが精神は恍惚として尙夢中の事が耳底に殘りており升から直に筆を執りまして後や先きと記憶に存していることを記載して後日の備忘否記念として秘藏しておりまーたが頃日懇意な老信者が來まして是を讀で殊の外喜びまして此書は徒らに篋底に葬りて蠹虫の飼食にするよりは寧ろ印刷して世の信者に頒かつべしさすれば人を敎化する道に於て

多少の利益は必ずあるであろうから是非思ひ立てと頻りに勤めて呉れましたのですけれども元來無教育の私が書き綴りました位のものですから丸で文にも何にもなつて居りませんので世に出して強て人の嗤笑を買ひますのも老い先き短き貧道の恥辱と思ひますから只管辭退しましたが信者は一向容聞して呉れません頭を横に振て申しますには此書は畢意老僧の樂に筆記したもので決して大人君子の閲覧に供するものでなく唯我等の如き六十の坂を越へて普通の教育をも受けたともなき者やまだ家庭に在て學校にも通はぬ兒童等に御伽話として知らず識らずの中に佛教の大意を心得さするに好き材料であると思ひて勸めるので決して無理を言ふのではない老僧の無學は地方人士の百も承知して居ることで在るから今更其樣に心配する必用もなく又其無教育の老僧が手に成る書物を世に紹介するのも一興ではないかと強て勸めるのですから貧道も辞に言葉もなく己を得ずして終に印刷にする事と成りましたから讀者諸君は貧道が夢中の誑言として一笑に附し給へば此の上も無き幸福であります

大正二年　月　日

兵庫會下山麓積德會にて

原田月音識す

光明和合陀羅尼經畧解

如是我聞往昔法樂比丘富貴山に在りて一切衆生の苦患を除かんが爲めに大道眞開と名づくる行者に二十三字の遍照金剛無上甚深微妙の法を說き給ふ是光明眞言釋述なれども編者は此れを光明和合陀羅尼と假りに名を附して其功德を說かんとす讀者これを諒せられよ法樂比丘眞開に說て曰さて此陀羅尼の初めに唵の一字を唱へ奉るは廣大なる供養の義にして香華燈明飲食の供養の功德備りて三世の諸佛悉く滿足し給ふこと疑ひ無しと此に於て眞開行者不審を生し問ふて曰く唵の一字何故に此の如く廣大なる功德ありやと比丘答へて此の一字は是れ諸佛菩薩の心中の秘密呪にして此一字を唱ふれば萬億無數の諸佛如來歡喜し給ひ一切諸佛の慈悲の光明が和合なすが故なりと

次に　阿謨伽毘盧遮那

此七字を唱ふれば諸佛諸菩薩もろともに二世の求願を得せしめて衆生を救け給ひ唱ふる我等が其まゝに大日如來の御身にて說法し給ふ姿にて大日如來の智惠の德を得て世間の人を

教化することが出來て世の中の人に尊まれ嬰兒が慈母を慕ふが如く其眞實なる慈悲心に化せられて一切の衆生が佛道に成ずる事疑なし又此七字は十方三千大千世界の中央の本地大日如來の三世常住法界體性智の光明なり此光明の佛は遍く十方無量無邊の三千大千世界の諸佛菩薩や一切衆生の我等迄も晝夜に守護し給ふ大慈大悲深甚の父母に在します故に此陀羅尼の七字の音を聞く時は大日如來の光明に照されて極樂に往生すること疑ひなしと述べ給ひ尙語をつぎて曰く

次に　摩訶母陀羅

此眞言の大印は生佛不二と印可して一切衆生を悉く菩提の道にぞ入れ給ふ又此眞言は東方大圓鏡智阿閦佛の光明なり故に大日如來の菩提心を司配し給ふに依り藥師如來と一身同體なるが故に此呪を一心に唱ぶ者は阿閦佛の力によりて無病安樂にして一切の怖畏厄難を滅除し佛の守護を得て家運長久何事も自由自在にして臨終の時も精神錯乱顚倒すること無く身心の苦痛も覺へずして大日如來の國土に上品の往生を得せしめ給ふ

次に　摩尼

此寶珠の利益には此世をかけて未來まで福壽意の如にして大安樂の身とぞなる又此二字の呪は南方平等性智寶生佛の光明なり此光明の佛は大日如來の福德を司配し給ふなり故に此呪を一心に唱ふれば南方の平等性智寶生佛の力に依りて種々の寶や福を請ひ受け我心に無量の快樂を得て一切の衆生と共に樂む事が出來得るなり

次に　鉢納摩

此の呪を唱ふる其人はいかなる罪も消滅し華の臺に招かれて心の蓮を開くなり又此呪は西方の妙觀察智阿彌陀佛の光明なり此佛は大日如來の說法の德を司配し給ふ故唱ふる者は妙觀察智阿彌陀佛の力に依りて速かに正覺を得て一切衆生を敎化する事自由自在なり

次に　入縛囉囉縛囉韈哩多耶

此呪を唱ふる光明に無明變じて明となり數多の我等を攝取して有緣の淨土に安き給ひ又萬の願望成就して佛も我等も隔なき神通自在の身を得べし又此陀羅尼は北方の成所作智不空成就佛の光明なり是れ即ち釋迦牟尼佛の事にて此佛は大日如來の善道を悉く司配し給ふ故に此呪を一心に唱ふれば如何程愚なる者も釋迦牟尼佛の力に依りて佛の位を得る事が

出來るなり以上五佛を五智の如來と云ふ

次に　　吽

吽字を唱ふる功力には罪障深き我々が造りし地獄も破られて忽ち淨土と成りぬべし亡者の爲に呪を誦じて土砂をば加持一回向せば極重惡の輩も速得解脫と說き玉ふ又此の陀羅尼は阿胎藏界無量力大菩薩吽金剛界無量力大菩薩の二佛にて阿吽の二字なり此の阿吽は大日如來の右と左の慈悲の眼の光明の作用を司配し給ふなり總て慈悲の眼に惡しきと思ふことはあらじ佛は罪を犯すもの程愍然に思召され慈悲を垂れさせ給ふが故に此神呪を唱ふれば一切の諸佛菩薩の慈悲の光明に照らされて惡業消滅し惡魔の障碍も忽ち變じて慈愛心を生じ日夜眞言誦持の衆生を守護するなり以上は陀羅尼の利益の大畧を說きしも尙是より進て此光明和合陀羅尼の功德を總括して詳しく陳べ聞かせんと說て曰く

抑も此光明和合陀羅尼と云ふは三世三劫の一切の諸佛如來一切の菩薩等の心中の密言なれば一遍を誦すれば百萬無量の大乘經百萬無量の陀羅尼百萬無量の法門を誦じ了る其功德よりも最勝なりとす此れ大日如來の肝心の秘蜜呪なり三世三劫の一切の諸佛此の眞言即ち

光明和合陀羅尼を踊持する力に由て速かに正覺を成することを得この大神呪は是百億無數の諸佛如來の母百億無數の菩薩聖衆の母なり是れ大明呪なり是無量呪なり是無等々呪なり是れに依りて光明和合陀羅尼と名づく故に此の經の音を聞く者は諸の罪業忽ち消滅して菩薩の位を得べし若し畜類なれば其業が消滅し人間界へ生を得又臨終の人の爲めに讀誦すれば五智の如來その人の爲めに手を授けて極樂淨土に引導し給ふこと疑ひなしと述べ給ひ又土砂の功德を說て茲に大惡無道の罪人ありて微塵程の善根も行ひし事なく日夜罪業を造りて終に地獄へ隨せし者を救はんと欲せば其墓所に至りて土妙を散布し加持回向せば忽ち重罪を消滅し地獄の苦を免かれて極樂に往生すべし是土砂の功德にして眞言加持の土砂は大日如來の慈悲の光明なればなり又死者の遺骸に此土砂をかけて神呪を誦せば即時に土砂の中より五色の光明を放ちて死者の身を照らし極樂に往生せしひべし此等死者は臨終に際して口に一遍の眞言も唱へし事なき身も大日如來慈悲の光明が遍く照らすが故に其功德が土砂にまで通じて我れ知らず極樂へ往生する事が出來得るなり是れ即ち大日如來の大他力の本願と仰ぎ奉るに尙あまりあり斯る不思議の大利益を思へば假令百千萬兩の黃金を積

とも尙ほ土砂一粒の價にだも如かざるなりされば若し是を得たる者は如意寶珠の如く思ふべし今現に土砂を死體にかけ和になるは是卽ち五智の如來の光明に照らされて重罪が自ら滅除するが故なり世間の人其難有道理を知らず只妙藥や禁厭の樣に思ふを皆心得違い也此の如く重罪の人の死體にかけた計りにても極樂淨土に往生する程の功德あれば人々在世中より土砂を身に添へ守護として現世未來の大利益を蒙る可し又此陀羅尼を懈らず唱ふる者は七代善夢とて有りがたき夢想を蒙ると言ひ及現に諸佛の灌頂をも授け給ふとも言ふ又有ゆる一切諸敎功德は此光明眞言廿三字の中に含むなり又此廿三字は阿吽二字の中に含まれ吽字は阿字の中にこもりたる故是れ卽ち大日如來一字眞言と云て一切諸敎の功德は此中に在りて釋迦も阿彌陀も其他一切の諸佛菩薩も此阿字を悟りて成佛すと言ひ諸法の至極とする眞如實相の妙理又三世諸佛因位行願十方淨土の莊嚴も皆此阿字にこもりて漏れたる事なし故に臨終の時に當りて一言の御經も唱へ難き身も唯阿字を念ずれは成佛疑なしと我等が寢たる間も鼻口より出入する息風は阿吽の二字にして夢の間も相續して絕間なく奉唱るは此眞言ばかりなり故に攝眞實經には阿字を性自成就の眞言成りと名づけ給へ

り此の義を能くよく心得念持して平日に安心決定せば極樂淨土に往生すること夢々疑ひなしと道理を盡して述べ玉へば大道眞開大に感歎し春々服膺して終身忘れずと誓ひ尙普くこれを世間に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道に成ぜんと述べたり於此法樂比丘尙ほ語りて曰く我も又此廣大無邊の功德を世の中の衆生に說て修身齊家の道を敎へ世道人心を利益せんと古人の說敎法話を混合して光明眞言釋述光明和合陀羅尼と假りに名を附し五恩三歸五戒十善戒を通俗的に釋述したるもの一卷あれば是れをも說き聞かせて衆生濟度の大任を總て汝に委せんと淳々說て曰く抑此光明和合陀羅尼と云ふは萬億無數の諸佛如來の心中の秘密藏にして一切諸佛の功德皆此中に含むが故に此一卷を光明和合陀羅尼と云ふなり故に此中には釋迦如來を始め聖人君子の說き給ひし法規訓戒の中五恩五戒十善戒に至る迄大小漏らさず說き盡くしたれば我は先つ五恩より說き始むべし

扨て此の五恩と言ふは第一が國王の恩第二が三寶の恩第三が父母の恩第四が衆生の恩第五が德の恩なり

第一國王の恩と云ふは國王が法律を設けて我等人民の性命財產を保護し給ふ故に我々庶民

は晝夜安心の手足を伸ばして安々と寢食することが出來得るなり是れ編に國王樣の御守護の賜にして我等人民の幸福なり萬一此御加護がなかりせば短き者は長き者に卷かれ弱き者は強き者に呑まれ又大惡無道の者に迫害せられて搏噬掠奪に逢ひ終に貴重の生命財產を失ふに至る故に此の有り難き廣大無邊の御恩德を肝銘して王法佛法の御制禁は勿論總ての御法律を遵奉して背かざるやう注意して公祖諸民費等は規定の期日迄に忘らず上納すべきものなり第三三寶の恩と云ふは佛法僧の三尊は世間の金寶の能く人の貧困を救ふが如く我等生死に迷へる煩惱惡業を除て能く迷苦を救ひ給ふが故に寶と云ふなり

佛とは覺の義にして自ら無我の眞理を覺り六神通を得て一切衆生に因果の眞理を覺悟せしめ給ふ故に佛と云ふ又此六神通と云ふは第一が宿命通と云ふて一切の衆生が久遠の過去より現在未來と移變する其間の由來を明らかに知るを云ふ第二を天眼通と云ふは三千世界の內外を通じて森羅萬象大小漏らさず達觀することなり第三天耳通と云ふは十方世界中の有謂音響を觀音することなり第四他心通と云ふは三千大千世界の中に棲息する物の心を明らかに知る事にて所謂觀心の術なり第五神足通とは天地虛空水火の中を自由自在に驅け巡る

ことを云ふなり

第六漏神通と云ふは旱魃に雨を降し水無き處に水を湧して總ての動植物を潤すことを自由自在にする事なり

以上を六神通と云ふて佛は皆此の德を備へて一切衆生を救はんと久遠の昔より晝夜の暇なく守護し給ふ是れが佛の本分と云ものなり次に法此法と云ふは上に謂ふ所の諸佛菩薩は五戒十善六度萬行の法門に依りて發心修行し給ひて佛果を得給へるものなれば是等の一切の法門は卽ち三世諸佛の能生の母にして又諸佛の師とし敬ひ給ふ所なれば我等が如き淺猿しき凡夫に於ては斯法を恭敬供養して反邪歸正して世間出世の二利の善願を成就すべきなり是則ち法寶の恩と云ふなり次に僧

此僧と云は衆和合と釋す曰く上の如き因果の法理を聞て深く信心を發起して自ら戒定慧の三學の法實を修し又能く他に敎へて此法門を修行せしむる者を僧と云ふ往昔秘密八祖中にて遠く印度を去て直に我國に來て法を傳へ給へるは卽ち第五の善無畏三藏これ其人なり該三藏は中天竺國の帝王なりしが大に慮る所ありて王位に在りては一國一世を利益するこ

とあれども廣く萬邦百世の一切衆生を濟度すること能はざるのみならず王位に在りては罪を造ること多し願くは我れ出家して佛法を以て遍く法界の一切衆生を濟度せんと誓願し寶位を脱して躬ら遁れて其叔母即ち隣國の王妃の許に到て出家せんことを請ひ其國内最尊の高僧を請じ出家學道し己て普く五天竺を歴遊し遂に大唐開元三年に支那國に至り帝王の歸依を受け更に小舟を泛て我國に聖武帝の時に來朝し大和國久米寺に滯錫し給ふこと三年彼寺の大塔建立して梵經を收め給へり是卽本邦に眞言秘密敎を弘通するの濫觴なり後八十餘年を經て弘法大師此塔の中に入り大日經七卷を感得して密敎を弘傳し給へり此の如く僧は一切衆生を濟度する大導師にして身に五戒十戒を持ち慈悲を旨として法話に說敎を專一として此世から地獄の罪業を造る大惡無道の行をする者を誡めんと不動の如く地藏の如く鬼となり佛となり或は憐愍を加へ或は降伏し惡をたち善を修せしめ此世から造る地獄の苦患を免かれしめんと一切衆生の地獄なる暗き道へ行く者を必死の力即ち金剛功力を出して明るき極樂道へ引込むが僧の本分である以上の三寶は一切衆生の拔苦與樂である故に此三寶を奉歸依れば其功德を以て無量の苦腦災惡を滅除し自然の福德を增長し現世安隱後生善

處六親眷屬法界一切の衆生と皆共に佛果大菩提を成すること疑ひなし第三父母の恩と云ふは父の恩の高きこと山の如く母の恩の深きこと海の如く廣大なること父母恩重經及孝子經父母難報經心地觀經等皆大同なり就中恩重經尤も丁寧に說けり次に孝子經と難報經とは稍や略說にして二經は稍や相同じ孝子經に世尊諸の沙門に告給はく子の親を養ふに甘露百味以て其口を恣にし天樂衆音以て其耳を娛しましめ妙衣上服其身を光曜し兩肩に父母を荷負して四海を周流して子の年命を訖て恩養に賽はゞ孝と云ふべきかと諸の沙門曰く爾りと世尊の曰く未だ孝とせず若し親顏闇にして三寶に歸依せしめ因果を信じ五戒を奉持せしめば則ち孝子にして眞實に親の恩を報ずとて三寶に歸依せしめ因果を信じ五戒を奉持せしめば則ち孝子にして眞實に親の恩を報ずとなすべーと具さには經文の如し是を父母の恩の大意とす父母の恩は廣大にして言ひ盡し難きも養育の恩を先として巨細に是れを陳述すれば卽ち過古の因緣によりて母の胎内に一滴の水が宿る是れを妊娠といふ是れより十ケ月の其間胎兒發育するに隨ひ母の身體を非常に苦しむる而己ならず畸形醜體の生せん事を恐れ夜も碌々に眠る能はず只管其兒の健全に生れん事を神に祈り佛に誓ひ產期の近くに隨ひ醫師の診察を請け服藥養生怠らず產前の準

備は盥襁褓は勿論湯上げ産衣に至る迄總て此れを用意し出産の時來れば醫師を招き産婆を呼び彼の世此の世の苦しみも幸ひ大事に至らずして身體全たき兒を生めば夫婦の喜び一方ならず先づ安心の眉を開き親類縁者に通知して醫師の謝儀やら産婆の禮出産届の賃錢など多くの金を費したゞ其上に一門の人を招きて山海の珍味の馳走を振舞ひて命名式を擧げたる其後は生兒の愛に引されて寒き風にも得あてず暑き處へも得出さず虫の藥や風藥食物撰びに心配し夫婦が晝夜看護して生長するに隨ひて其兒の傍ら離れずに葡萄ば歩行の親心やがて七八歳にも成りぬれば早入學の手續し學校行の衣裳から本や筆硯墨迄皆準備して入學させた其後は受持教師に進物や連れ朋輩の心付け學校先生を請待し心盡の饗應も其子の教育薫陶を願はん親の志はや小學校も卒業せば尚中學や大學と漸次高尚の教育一人普優れし人物に仕上んものと子が言ふ儘に學資して只管其子の成功を樂みにして兩親が晝夜艱難苦勞して行き度き處も得行かず着たき着物も得着ずして長の年月働きし其心勞は實に海岳も啻ならずして拙き筆や言語の盡す所に非らざるなり此の如き大恩を受けたる我々同胞は人に優れた孝養して其大恩の萬一を親に報ふが本分なるに大抵世間の人は皆十に七八

此恩を忘却したる而已ならず親の辛苦の學資をば殘らず遊蕩に費消して學校は中途に退學し家に還りて両親に心配かけた其上に家事の事は他所に見て親の仕事の手傳も寢間の掃除もすればこそ晝は寢ながら小説やつまらぬ雜誌を讀むばかり夜は夜遊び朝寢して廓通や茶屋遊び道樂三味仕盡して艱難辛苦で拵へた親の財産傾けて先祖傳來の家業さゑ出來かねる迄に靈落しても我身の罪業には少しも氣付かず瓜の蔓には茄子は出來ぬと人は笑へど両親は極道する子が可愛くて親類一門は申に及ばず寺の僧侶や村役人に事の始末を打明て度々意見を加ふれど親の慈悲とも思はゞこそ馬耳東風と聞流し身の將來も考へず大恩受し両親を犬馬の如く虐待して僅に殘る隱居料皆賣飛し遊興に投せんとのと老先の短き親の死ぬる日を數へて待ぞ愚かなる鳩に三枝の禮も有り慈烏に反哺の孝もある鳥類でさへ皆親の恩を知らぬは無きものを萬物の靈と生れし人間が身の程知らぬ親不孝鳥畜類にも劣るとはあな恐る可し人面獸心と云ふものなり次に第四

衆生の恩と云ふは凡そ佛教の眞理は三世因果善惡應報を以て本とす故に今中等已上の父母の教育を受け乳哺飲食衣服を被着して言語を學び家庭の育教を受け教師に就て文字を讀み

智識を研くことを得るは一切衆生の恩にあらざるなきは眼前視易き理にして世人の能く知る所なり然るに此の如く父母の恩を蒙り親戚眷屬奴僕の保護を得て文字禮節を知るが如き好結果は何の原因ありて爾るやと問はば人如何か答んとするや今佛敎の意は世界一切善惡苦樂の果報は事々物々一として原因なくして偶然に出來たる者なければ今こそ母胎に託し此敎育を蒙るは謂ゆる前世に其善根の原因を植しことありて此好結果を感得したるなり就中偶ま世に生れながらに能く文字を讀む者あり書くものあり縫裁工藝等に巧みなるあるは何故に該事に長して人に勝れて巧なるやと云はゞ是皆前世の原因の然らしむるなり謂ゆる前生に學を勉め業を勵しものは生ながら自ら其學に通じ其業に進み易きなり又之に反して生來其事に魯鈍にして上達する能はざるは前世に其業に怠り又は其等の事業を妨げたるの餘業力の結果なりと說き給へり學藝に例して身相の好醜福力の厚薄皆準知すべし左れば前世に其學を敎ひ其業を授けしは誰人ぞと問はゞ必ず前生に己自らも善根力ありて又父母の愛育によりて家庭の敎育を受け工藝を習學せしことあるを以て今生に生れながら文字書藝裁縫等に巧みなることを得るなりと說けり此はこれ己が前生の父母の恩なれば此世の父母に次で前世の父母及師長の恩を報ずべきなり此等の恩を衆生恩と云ふ故に心地觀經には衆生恩とは無始より一切衆生五道に輪轉し百千劫を經て多生の中に於て互に父母と爲る故に一切男子は是吾父一切女人は是我悲母なり生々の中に大恩ある故に猶現在父母の恩の如く等くして差別なし是の如くの昔恩未だ報ずること能はず或は忘業に因て諸〻の違順を生ず執着を以ての故に反て其怨を爲す前生に曾て父母たるを了せず恩を報じて互に饒益を爲すべき所に於て饒益すること無き者を名て不孝と爲すこの因緣を以て諸の衆生類一切時に於て亦大恩あり云云是を衆生恩とす又川を渡るに橋を以し航海には舟あり飲食には米麥酒醬油あり米麥野菜を作るには耕作の道あり暗夜を照すには燈火蠟燭あり其他總ての器械を製造するに法あり學文工藝の一切の法を授かりて世間の人が士農工商と其れそれ其職業によりて生活の出來得るは是皆衆生の恩なり次に德の恩と云ふ（是は編者之作なり）德の恩とは以上解釋の如く此四恩の鴻德を報せんと欲せば必ず十善因果應報の眞理を以て規則として己を修め他を化し道德を修むるにあらずんは眞個に忠孝信義の道を全くすると能はざるべし偖て此の德の恩と云ふは他の儀に非らず我等が此世に生れ來て身分相應の生活する

は造物者即ち神佛の恩である故に能々心得て惡事を侵すべからざるは勿論のことなるに廣く世の中を見渡せば十に七八は破戒不道德の人にて充たさるは如何なる故か實に慨嘆の至りならずやと比丘非常に嘆息せらる時に行者比丘に問ふて曰く古語にも人の性は善なりと申されたり然るに此の如く十惡の犯罪者多きは如何なる道理ぞ我其解釋に苦しむと此に於て比丘答て曰く是皆五欲に迷はさるゝが故なり是十善戒を護持せざるが故なり此の欲は生活上に付種々の恐ろしき附き物となり世間の人を魅するなり譬て言はば茲に寶玉あらんに是を烟突の上に吊るし又塵埃の中に置く時は忽ち其光澤を失ひ炭團や土の玉の如くなる事必然の理なり人の性も此の如く性は善にして心中の明德鏡の如く光り輝くものなれども日夜三毒の酒に醉ひ五欲の雲に掩はれて不知不識の間に身口意の十惡を造り自ら地獄に墮落するなり是五欲と云ふ惡魔に魅せられて折角前生の因緣にて萬特の靈たる人間に生れ心の明鏡を持ちながら煤や塵埃に曇らすは嘆息の外なし故に昔より聖人や君子や多くの知識方が種々の道を立て敎化せられたものなり又茲に一つの面白き法話あり心の煤れたるには慈悲と言ふ火で炕り乾かし思遣りと言ふ鎗で塵埃を除け羅集と言ふ湯で洗濯し其後勤行と言ふ紛を付けて磨く可し此の如くすれば如何程曇りたる心鏡も光輝を放ち十方の闇を照すなりと扱て又慈悲と云ふは第一殺生戒を持て漫りに生物を殺さず又徒らに人の所有の山林草木を伐採せず人の難義を救助し殊更孤兒や貧苦の人を憐みて衣食を施し僧侶修行者等には布施や供養を怠らず其外神社佛閣などの寄進は勿論道路橋梁の修膳學事衞生敎育に至る迄總て世道人心を稗益し公役を助くる事に身分相應の義務を盡すを云ふなり又思遣と云ふは我身を捻りて人の痛さを知れと云ふ諺の如く我身の辛さを思ひ遣りて人の難義を救ふ事なり又羅集と云ふは人らしゆうする事にて人々十善戒を護持し身口意の十惡を犯す事なく男は男らしく女は女らしく親は親らしく子は子らしく夫は夫らしく婦は婦らしく師は師らしく弟子は弟子らしくして人道を重ずるを云ふなり次に勤行と云ふは家業を勤むる事なり男は男の業女は女の業百姓は農業役人は役人の事務と各々其職業に勉勵する事を言ふ以上を能々心得て其業を怠らぬ樣に務むる時は自然と心の鏡も磨け其の身の光り輝きて衆人に尊敬せらるなり是れを勤行と云ふ又一富士二鷹三茄子と云ふ事ありて夢に見ても吉事ある樣に昔より言ひ傳へたり此の事に付或人は面白く解釋せしことを聞きたり今其

れを說き聞かせんと法樂比丘は語りて曰く扨て此の一富士と言ふは一内と言ふ意にて一軒の内の事なり次に二鷹とは一軒の内の人の心が能く似て善良なる主人の命令に背かぬを言ふ次に三茄子とは此の如く一家の人々が主人の心に似て圓滿なるは誠に美しき家庭の美を成すと言ものなれば三茄子と言ふなり次に穢く働て奇麗に喰へと言ふ諺あり是れは人の職業に甲乙無くして金の多く儲かる事に何事に仍らず從事すべし又世間の人が道路に拋棄して顧ざるものにても役に立物は何によらず拾ひ集めて用に立て廢物を利用して國家を利益するなり此の如き仕事は人々皆賤業として從事するを嫌へども決して輕蔑すべき業に非らず故に何事をするも仕事に甲乙なーと思ひ暫時の間も怠らず無益の事に貴重の時間を過消せず家業に精出て年々收むる諸稅民費は勿論國家に對する義捐金は吝氣も無く出金し其外親類近處の義務等何事に依らず身分相應に果すを穢く働て奇麗に喰へとは言ふなり次に十善戒を畧述せん

十善戒と言ふは　不殺生　不偷盜　不邪婬　不忘語　不綺語　不惡口　不兩舌　不慳貪　不瞋恚　不邪見　以上を十善戒と言ふ

第一不殺生戒とは慈悲の心を以て生あるものは禽獸蟲魚何によらず命を取らぬ事を言ふ

無病長久にて子孫繁榮するは此戒の德なり

第二不偷盜戒とは一切他を物を盜まぬ事にて五穀は勿論草木の類に至る迄其利を奪ふことなく其心を得せしむるを言ふ國家の富榮なる此戒の德なり

第三不邪婬戒とは男女の道を正しく不義いたづらをせぬ事にて道ならぬ行は天地神明の惡み玉ふ所にて身を修め家を齊ふ皆此戒の德なり

第四不忘語戒とは虛言云はぬ事にて身にも心にも僞なくば天地神明の惠を蒙るなり衆人の信用を得て商賣繁昌する皆此戒の德なり

第五不綺語とは世に惡口と云ふは是なり又例を擧て云はば時鳥の歌に唯有明の月ぞ殘れると云ふは正語なり夫を世の誹諧者が偖はあの月が鳴たか時鳥と云ふが如きは綺語なり此綺語は大人の德を傷け天地の道にも違ふなり又天地の道に違ふ故に綺語の人は世に在て其身に幸福なきなり諸人に尊敬を受くる皆此戒を護持する德なり

第六不惡口とは他人を罵り恥辱を與たりするは大人君子の道に非らず一家の和睦四海の泰

平も皆此戒によるなり

第七不兩舌戒とは二枚舌を使はぬことにして是より大事を惹起するに至る故に大人君子は佞者を退け小人に交際せず正直なる者を愛する故に上下意志通じて人々惡を斷ち善を修するに至るは皆此戒の德なり

第八不慳貪戒とは何事も天命と知れば貴きも賤きも前世の因緣因果とも諦らめ一切他の物を貪り求めぬを云ふ魚は餌食の爲め身を亡し鳥獸も是れが爲め命を棄るものなれば人間も欲の爲めに德を失はぬ樣注意すべし五穀成就國土安穩なる此戒の德なり

第九不愼恚戒とは何事によらず腹を立て憤怒らぬを云ふ瞋恚は總ての善根を亡ぼし生々世々の貧賤となりて醜陋を極むるなり國土惡獸毒蟲少なきは此戒の德なり

第十不邪見とは邪な心を持たぬ事にして父母兄弟は申すまでもなく親類緣者近隣朋友其外世間一般の人に交るには誠意誠心を以てし人の困難を救助するは勿論禽獸蟲魚に至る迄無慈悲の取扱をせぬを言ふ三寶の冥助を得て諸福增長するは皆この德なり

右十善戒と言ふは聖主の天命を受けて萬民を撫育し玉ふ法なり此法近くは人となる道にして遠くは佛萬德を成就する法なりと比丘又曰

尙十善は龍樹菩薩の大論には有佛無佛常有世間の戒とあつて佛の出世にあれ又佛の未だ出世し玉はざる以前にもあれ凡そ人界へ生を得たものは男女を論ぜず必ず疎畧にせざるは本よりの事であるとの意を云ふ此の如く十善戒は貴き法にして庶民の護持せざる可からざるものなり御經に孝を戒とすと說き玉へりされば兩親は申すもさらなり先祖代々および主家に對し不孝不忠なるは此戒をやぶるとしる可し此戒を受くれば愈家榮へ子孫長久にして現世には無病福德の身となり後生成佛の道と知るべし往生を願ふ人々にはよき極樂の土產と知るべし次に布施の由來と飮酒の戒を說き尙ほ十善の掟をも詳述して曰く汝行者よ以上詳細に說き聞せたる一卷は我衆生濟度の爲に記載したる諸佛菩薩の肝心の秘密書なれば汝此書を以て一切衆生を濟度すべしと懇に說き諭されければ行者立て三拜九拜して此秘書を授かる上は諸佛諸菩薩の深き御意を奉戴して佛法の戒律は總て此れを護持し衆生濟度の大任に當らんことを誓ひ深く法樂比丘に恩を謝して退き去らんとす比丘尙ほ呼び止めて十定の掟と地獄の由來三歸五戒なぞを說き聞かせて消へ去りぬ

十定之掟

身尊して賤きを捨ず暗を捨ず愚なるを捨ず惡人を毀はず貧を捨ず衰ふ者を捨ず適さるを捨ず僞りを捨ず缺たるを捨ず困果因緣を知て他を恨むる事勿れ是が十定の掟なり

右十善戒や十定之掟を覺りなば朝夕は勿論行住坐臥二六時中暫の間も心に忘れぬ樣にして道心を堅固にせば身口意の十惡の念は自然に消滅して佛の道を成就するを得るなり

但し朝夕三皈十善戒を唱て志を正良にすべし

次に　三歸　後に畧解あり

歸依佛　歸依法　歸依僧

次に　五戒

不殺生　不偷盜　不邪淫　不忘語　不飲酒　内四戒は已に述べたれば飲酒戒のみ後に詳述せり

先懺悔文

我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋癡　從身語意之所生　一切我今皆懺悔

此は華嚴經の行願品に說玉へる所の發露懺悔の文なり文の意は我昔よりこのかた造れる所の諸〳〵の惡業はいつを始と云ことも知れぬ時より造る所にして皆貪欲瞋恚愚癡の三毒忘念の煩腦を本として其煩腦に由て身口意の三業にわたり生ずる所の罪咎なれば今此諸〳〵の惡業を悉く懺悔してあやまり奉ると云經文なりされば朝暮佛前に向ひ勤行を營むたびごとに最初に此文を一遍唱へ生身の如來生身の高祖大師に對ひ奉ると思ひ無始以來の罪障を懺悔すべし其作法は手は合掌して口には此懺悔の文を唱へ意には無始より今日に至るまで造りし所の十惡五逆等の諸〳〵の罪を懺悔し奉る皆悉く消滅せしめ玉へと念じて聊も罪をかくすこと勿れかくす時は罪業ますます重し故に涅槃經には若作り一罪を覆ひ藏せば其罪ますます增長す發露懺悔すれば罪すなはち消滅すと說玉へりされば念念作作三業四戒儀に亘り罪業を常に造りて止まぬ我等なれば

日日に造りし罪は塵ほこり懺悔の文は箒なりけり

かくよめる古歌の通り此文を箒として日日に心の掃除怠りなく懺悔し奉るべきこと肝要なり

次に　三歸

弟子某甲盡未來際歸依佛歸依法歸依僧

三歸とは佛に歸依し奉り法に歸依し奉り僧に歸依し奉るを云ふ歸依とは梵語に南無と云ひ又曩謨と云此には歸命と翻す即歸依の義なり要を取て云はば身命を棄て佛法僧の三寶に承事すと云ことにて此三歸戒は邪を破し正に歸し以て佛道に入るの根本たり是故に華嚴經には於佛法僧に起決定信と說玉ひ又大日經には其心端直に於佛法僧に心得決定と說玉へり是れ皆俱に三歸滿足のことなり顯密の兩經異なれども三歸を以て入道の基とすることは一なり此外三歸の功德を說ける經多し今其一二を擧れば正法念經には受三歸者は不墮三惡道と說き大集經には懷姙の女人胎內の安からざることを知らば三歸戒を受べし胎內の小兒も損害なく生れ出たる後も身心具足し善神まもると說玉へり又梵網經の中には業障深き者は二刼三刼にも父母三寶の名字をも聞くこと能はずと說玉へりかく三歸依の名字は聞くすら難しとするなれば況や自唱へ自受持するは實に遇ひ易からざる御緣ぞと歡喜して日夜佛前に向ふことに三遍宛之を唱へて深く三寶に歸依し奉るべし

次に　三竟

弟子某甲盡未來際歸依佛竟歸依法竟歸依僧竟

此は次上の三歸戒受持の決定の位を顯すまでにて別意あるに非れは更に畧解を設けず三歸に准知して日日佛前に向ふごとに三遍宛之を唱へてますます三寶歸依の念慮を厚く勵ますべし

元祖圓光大師御傳文

南無阿彌陀佛

抑南無阿彌陀佛六字の名號は萬法諸法の本げんなるがゆゑに晝六つとき夜六つどき星のひかりも六字の名號なりしかるに人間六根六職四をたも戒ち晝夜しゆするも南無阿彌陀佛六字の名號なりしかるに天に日のひかり月のひかりとて三千世界を照したまふも南無阿彌陀佛の光明のひかりなりかるがゆゑに光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とときたまふなりされば梵天たいしやくゑんまわうまで念佛をよるこび玉へば唯一念かたじけなくおもふて念佛を申すべきなり南無阿彌陀佛の名號は萬法諸法の本源なりさればあごん經をもつて南

の字一字をつくり玉ふ華嚴經の六十卷をもつて無の字をつくり玉ふ大はんにやを以て阿の字を作り玉ふ天台六十卷ほうとう四十一卷をもつて彌の字をつくり玉ふ大般若法華經壹部八卷二十八品をもつて陀佛の二字を作り玉ふがゆゑに南無阿彌陀佛ととなへぬれば八萬諸聖教をよみ奉るなりかるがゆゑに南の字一字に七萬五千佛の佛籠りたまふ無の字一字に六千躰の佛こもり玉ふ阿の字には七万五千佛の佛をさまり玉ふ彌の字には六千躰の佛こもりたまふ陀の字には七万八千佛の佛をさまり玉ふ佛の字には十万がうじやの佛籠り玉ふがゆえに一たび南無阿彌陀佛をとなへるなれば諸々の佛を尊むしんなりまた神道には南の字一字に伊勢兩宮天照大神宮のこもらせ玉ふ無の字には熊野三社大權現のこもらせたまふ阿の字には八幡大菩薩のこもらせ玉ふ彌の字には十羅刹女のこもらせ玉ふ陀佛の二字には住吉四社明神の籠らせ玉ふと申ゆゑに一たび南無阿彌陀佛と唱へたてまつればもろもろの佛を導むしんなりならびに明神のこもらせ玉ふをあがめ奉る信なり神といふも佛といふも一躰分地にして別にあらず衆生さいどのために佛とも現して現世にては人間長久に守り玉ふ是によつて日本を神國と申すことも此いはれなり諸の衆生念佛を後生の事とばかりおも

ふは大なるあやまりなり念佛行者の身は今生にて諸天善神の氣にかなひ未來成佛うたがひなく是ばどに守り玉ふ念佛をなどか申さざらんや南無阿彌陀佛と申す功德は東西南北を入ものにして七寶をつみおきたのしむごとくなりたとへば一萬三千躰の佛をつくり又金をもつて高さ十丈の堂を建て堂塔の供養する功德より一念の念佛一遍のくどく猶も猶もすぐれたりとときたまふなり又四百四病のやまひおこり惡逆しんの神みだれ入とも百萬遍の念佛申ところへは來らず念佛現世あんをんごせうもせつしゆふしやとときたまふゆゑに西方淨土をねがふ安心にして智惠あるもちゐなきも身のけがれたるもとりわへず唯一すぢにみだの本願にまかせて南無阿彌陀佛ととなふべく又人間には佛法じまんとて佛のきらはせ玉ふじまんあり一つにはわが智惠ありとおもび愚痴をかろしめ富貴をおもひ貧なる人をみさげ申事みなくはんい人と思ひ賤しさをあなどらず唯僧俗男女諸ともに我高まんの氣をうち捨わさまし惡業の身なりとも南無西方淨土へつれゆき玉ゑと誓願ふかくたのむべきなり信心ふかき念佛の功力には南の一字に修羅道の苦をのがれ無阿彌の三字には餓鬼道の苦をのがれ陀の一字には畜生道の苦をのがれ佛の一字には一百三十六地獄の苦をのがれ今生にては

榮花さかへ子孫はんじやうにして後生成佛うたがひなきものなりかるがゆゑに一念の念佛には無量の罪もすなはち滅し現世の護念も無量攝取不捨とときたまふなり

源空在判

五刼思惟ノ苗ニチヨサイ永刼ノシロヲシテ
一念歸命ノタネヲオロシ自力雜行ノ艸ヲトリ
歸命盡十方无碍光如來
念々相續ノ水ヲ流シ往生ノ秋ニナリ
ヌレバコノミトルコソウレシケレ

愚禿親鸞○

建保六年トラ五月十三日

大部平太郎トノエ授與之

苅萱道心一枚法語

晝あれば必夜ありと知るが故に燈燭の備をなす暑あれば必寒ありと知るが故に秋の礎の音たへず老の眠を驚かせども生あれば必死ありと云事は知るやーらずや一向何の用意もなしこはいかなる心の怠にや無常迅速なり唯今もしれず死期の到來せし時いかんかせんや若吾言を用て死の備をせんと欲せば何時にもあれ唯今命終と思て萬事を放下し己が耳にきとふる程に高からずひくからず南無阿彌陀佛と十念すべし時と所と不淨をゑらばず唯わすれざるを第一とす努々をこたるべからず

建保元年正月廿四日

等阿彌陀佛

布施の由來

抑僧侶に布施をして我等が先祖代々の爲めに御經を讀むで貰ふと云ふ事は往昔釋迦如來の御弟子にて神通第一の目蓮尊者の御母が御逝去なされて以來尊者は日夜親母の御ことのみ思はれて暫時の間も忘れがたければ或時天眼通にて母御の行方お御覽なされしにあな畏しや母上は餓鬼道へ墮落して在す故尊者は今更の如く打ち驚かせられ此旨を師匠の釋迦如來に御問ねなされしに如來答てそれは汝を養育する爲めに無理な工面をしたる報ひなりと曰ひし故尊者は又如何にして此母を救ふべき哉と御問ねなされしに如來答へてそれは時節相應の食物にて膳部を整へ亡母の菩提の爲めに僧侶を請して供養せば其功德によりて母の

苦患を免るべしと曰へり尊者大いに悅びて親類緣者の寄附を得て佛事の準備を爲して衆の羅漢等を請待し最と叮嚀なる布施や膳部の供養して佛事を營まれけるに羅漢等の大施餓鬼の御經を讀で居る間に紫の雲に乘りて母御が昇天せられしを眼前に目蓮尊者が拜まれて嬉しさのあまり踊り舞られーと云ふ今に舊七月に盆踊をするは此由來なりと云ふ

飲酒戒

飲酒と言ふは酒を飲む事なり酒は五戒の中の一つなり酒と言ふ字は散水に酉なり此散水は一白にして北にあたる故釋迦の淨土を表するなり又酉は西にあたる彌陀の淨土を表すなり此の釋迦と阿彌陀は我々に極樂の道を敎へ導て下さる師匠なり此故師匠は尊むべきものにて七尺去ても師のかげを踏むべからずと言ふ古語の如くに敬はねばならぬ釋迦阿彌陀の淨土を表する酒を飲むと言ふは心得違の甚敷ものなり釋迦や阿彌陀の御恩德は山よりも高く海よりも深し此の如き廣大無邊不可思議の恩德を表する酒を輕々しく飲むが故に忽ち大罰を蒙りて精神錯亂し腹を痛め吐瀉に苦みをして此世からなる地獄の呵責を受るなり抑も人間は萬物の靈長にして總てのものゝ棟梁なり其靈長たる身が此の畏しき勿体なき酒を飲むと言ふは是又此世から餓鬼道に墮落するものにーて國の爲め家の爲めに働かねばならぬ者が酒の爲めに宿醉して二日三日と家業を怠り迎ひ酒などして飲み續け其後は頭痛逆上腹痛吐血胃病腦病と苦むも更に禁酒の戒を護持せず終に山林田畑家倉迄も飲み盡し親兄弟や妻子を悲歎せしめ親類緣者に心配させて他人に迄も損かけて人の憎むが聞辛さに終に他國に夜脫して先祖代々の墓所に草木を生し親や先祖の名譽を穢すは是皆酒を飲み過ぐる自業自得の罰なれば畏るべきは酒にして何人も愼みて禁酒戒を堅く護持し佛の敎にしたがふべきものなり

地獄之話

夫れ地獄と云ふは梵語にて是を捺落と云へり此邦に譯して苦器と云ふなり諸〳〵の罪人を其中に入て苦しむ譬ば世間の牢獄の如し地中に獄舍有が故に地獄と義飜するなり惠心僧都の往生要集に諸經論によりて百三十六地獄有る其中の八大地獄を明かにす第一が等活地獄なり此等活地獄と云ふのは殺生したる者の業報なり斫刺磨擣の責によりて身躰分散ー終ば又等く活かへるが故に等活と名づくるなり凡鳥の高く飛も魚の深く沈も皆是身命をおし

むが故ならずや然るに智慮の及ばざるを以て人の爲に鳥畜類魚類を損害せらるゝと雖も必ず後は其應報有る事たとへて言はば王法の牢獄有りて横行の輩を免さゞるが如なり第二が黒繩地獄と云ふなり此黒繩地獄と云ふのは偷盗の業報なるが故に獄卒罪人をとらへて黒繩を以て脊中に盤石を負せて樹の梢に追登らせて此木より彼木に黒繩を掛けおきて罪人を亘らしめ繩の半より炎の中に落し入れて苦しましむ或は黒繩を以て罪人の身を縱横にすみうち繩にしたがい熱鐵の鋸を以て挽苦しましむすべて黒繩を罪具とする故に黒繩地獄と名づくなり偖世間の盜賊門戸を越て財寶を奪ひ取て去る唯是のみを偷盗と云ふにあらず强惡非道にして二桝をつかい秤の目をぬすみ漫に利を貪らんとす此人たとひ當分の榮華ありと雖も末は通らず天地神明いかでか是を許したもふべきや現在なほ然り況や未來の責に於てをや麗魔王は淨玻璃の鏡に塵ばかりの小罪をも知りて俱生神は鐵札にしるして露程の輕罪をも許さゞるものなり第三が衆合地獄なり此衆合地獄と云ふは邪婬の業報なるが故に婬欲の罪を犯したる男が山の谷に居るなれば劒の山の頂きに女が現れて手を揚て招き聲を出して呼と思て漸く登りて其峯に至れば情なくも其人忽ち谷に下りて招き喚が如くにして常に昇り降り彼の劒に肉を剖れて唯骨のみ殘れども死ぬる事なく或は獄卒來りて罪人を谷間に追入るれば兩山逼りて身躰を擊刓し或は盤石の上に伏せしめ上より又盤石を以て打碎く血肉流れて迸ること瀧津瀨の如し故に衆合地獄と名く蓋し邪婬に五種あり一つには非時と云ふ此非時と云ふのは慎むべき日に漫に交る事なり二つには非處と云なり此非處と云ふのは其恐憚るべき處に於て房事を爲すを云ふなり三つには非女と云ふなり此非女と云ふのは男が色を好み或は畜類と交る事を云ふなり四つには非境と云ふなり此非境と云ふのは未だ月の經のも通せざる少女或は婬念も萠さゞる女を情なくも捕へて交る事を云ふ五つには非義と云ふなり此非義と云ふものは自妻を厭ひ嫌て他に交り女は夫に隱れて他に通じ或は父と女が交り子が母を犯し兄弟密通して禮を失ひ義を乱すを云ふと優婆塞戒經に見へたり慎まずんば有るべからず妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と說たまへば命つき魂去りて初めて罪門關樹の下に至りて黄なる涙を垂れ血の汗を流して千悔萬悔すれども更にもとへかへるなく契を結し妻は他に嫁して我を知らず賴みに思ひし子も今は家督を爭て親の菩提の爲に志ざゝず此時罪苦いよいよ增長す第四の叫喚地獄は飲酒の業報なり第五の大

叫喚地獄は妄語の業因なり故に皆な口よりして鐵丸銅汁を呑ませて服中を燒焦し或は獄卒罪人を縛りをきて熱鉄の鋏を以て舌を拔き眼を穿て苦まーむ罪人の泣叫ぶ聲は天地に響く故に叫喚と名く第六の焦熱地獄第七の大焦熱地獄は邪見破戒等の業報なる故に前より漸々次第に苦相百倍せり此焦熱地獄の豆ばかりの火を以て閻浮提に置けば草木禽獸も一時に悉く焚盡すと經說に見へたり如此盛なる猛火廣大にして燃あがる上に鉄熬を置き罪人の身に大鉄串を貫き表裏反覆ーて燒焦故に焦熱と云ふ昔大和の國矢田の寺滿米上人の初の名は滿慶と云なり彼滿慶上人が或時冥土に行き閻魔王に御敎化なされしに閻魔王から一俵の米を謝禮として滿慶に賜ふ滿慶上人が一俵の米を貰て生涯給事を滿足するが故に改めて滿米と稱す其上人閻魔王に請て八大地獄を巡見して大焦熱の地獄に至り見れば黑染の衣を身に着ー輪圓具足の法性塔六大無碍の錫・杖を執持の御手に打振りて火の中に苦み玉ふ一人の僧在るが故に上人是を見て閻魔王に問て曰く彼僧は何の罪にて彼樣な苦患をなし玉ふやと御問ね申されければ閻魔王は答へて我は知らず彼僧に問へと申されける故に上人は火の中の僧に向ひて貴僧は何の罪ありて其樣な苦しみを爲し玉ふやと問ね玉へば大火の中より本体を現はし我は罪を犯せし事なけれども一切衆生の中にも十惡五逆の諸罪の爲め地獄に墮して苦まねば成らぬ苦患者の爲めに此地藏菩薩が變りて日に三度大焦熱地獄の火中に入りて苦むなりと答へて又大火炎々として燃へ上る中に入り玉ふ其の姿を上人が拜みて故郷に歸へりて其形像を模す今の矢田の地藏尊是なり原を請ぬるに地藏毘盧遮那彌陀佛は一聆の異名にして大悲闡提の御姿を六道の街に現して一切衆生を度し玉ふ是を地藏の由緣と知るべし第八の阿鼻地獄は梵名なり此に譯ーて無間と云ふ是は五逆謗法及び虛受信施等の極重惡人を此中に墮ーて間なく大苦惱を受さす故に無間地獄と云なり又十八人の獄卒有頭の上に八の牛頭あり二の角より猛火を生じ二の頭に又八の眼あり都合六十四の內より鉄丸を迸らし猛火獄中に充滿する故に無間と号く其火炎の中に毒蛇猛虎等ありて火を吐き罪人を追ふ事は恰も蛇が蛙をねらうが如く所居の地獄わ己に此の如し其責苦の嚴しき事は說きがたー若佛が此地獄の苦相を具に說き玉へば聞者は悶絶して血を吐きて死すべし次に餓鬼道を辨せば梵名は閻利多と云ふ此土に譯ーて餓鬼と云なり飢て水食を得ず故に餓と云なり鬼は死靈の總名なり但し多財少財無財の三品あり閻魔王等を以て其上品とするなり

他は人界の塚の間だ或は山河に乍迷ひ水を見て飲んとすれば火となり五百歳にも一食を得ずと天竺尸羅城の餓鬼は物語りと云也又師字國の餓鬼は大海が七度山と成海と成事は見たれ共其間に只一食をも得たる事なしと云り然に我朝に於て常陸の國筑波山の男体權現は山下の產子を昔ゟ地獄に墮さず死靈を悉く當山の巖崛に止め置玉ふ然に高祖聖人稻田住居の砌り彼筑波權現の靈告に依て巖崛に至て數多の餓鬼を教化したまひ其所に有あふ釜の水を呑せ餓鬼道の三障を救ひ玉ふ此地を立身石の岩屋と号く三障とは一に外障と云ふなり是は水邊に近づけば後より人の追來る樣に恐ろしくて飲む事を得ざるなり二つには內障と云ふ是は咽は針の如く細く腹は大皷の如く張て飲む事を得ざるなり三には水を呑んとすれば忽ち猛火と化して飲む事を得ず是を三障と云なり次に畜生道を明さば梵語に底栗車と云ふなり此に翻して傍生とす多くは傍行の生類にして人間界に雜居する禽獸蟲魚等を傍生と云ひ又畜生とも云ふなり其の果報最も勝れたる者は龍宮城に住居して恰も天上の快樂の如しと雖も日々三熱の苦みを免れず此三熱と云ふは一には熱沙身を焦す二には熱風身を徹す三には金翅鳥の爲に日に一度苦むなり是を三熱と云ふなり此龍の外海中に住む物は漁者の網に身を亡し山野に走る物は獵師の矢先に命を失ふ者なり六畜の類も又牛は鼻面に絆れ馬は轡に縛られ重荷を負ひ或は重き車を引き又牛馬は人に掩て遠く行き又牛馬は自力の堪へ難きを人に告る事能はず又其終りは皮膚骨肉迄人の庖丁にかゝりて世を益するは實に愍然の至りなり又鶯は妙なる聲を能として籠の中に閉られ蚕は好き糸を吐くを益として終には釜の中で煮殺さるなり其他生類は譬ひ人の爲に用ひられずとも小なる物は大なる物に喰れ短き物は長きものに卷れて命を終る殘害殺戮の苦み今目前に邀り上來此地獄餓鬼畜生の苦患の重きより輕きに至る次第挙勝異論すれば瞋恚は地獄の因貪欲は餓鬼の因愚痴は畜生の因にして三毒煩惱は凡夫の自体なる故に愚痴若し異境へ走れば妻妾相嫉みて蛇身を感じ若し順の境に走れば男女相思て鴛鴦に生るゝ事因果必然の理ならずや貪欲瞋恚の業感も又准ろ知る可し古德も十惡心に快くして日夜に作ると悲嘆せられて起居の振舞皆ながら地獄の因畫夜の想念一として餓鬼畜生の業ならずと云ふ事なし是れを地獄の由來と云ふなり恐るべし愼む可し〳〵〳〵

光明和合陀羅尼 終

272
703

大正二年四月二十三日印刷
大正二年　月　日發行　定價

神戸市兵庫
編輯兼發行者　原田月音

備後福山町字府中町廿番地
印刷所　宮永活版所
電話四二四番

取次販賣所

終